

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第493号 2023年4月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

教育の基本

谷口 茂雄

さざなみ国語教室は、駆け出しの国語教師だった頃、『近江の子ども』の編集長をしておられた故高野倅生さんに、「国語教師の梁山泊を作ってほしい」とお願いして出来た研究集団です。

以来随分鍛えていただいたこの会から、巻頭言を書く機会を与えられたことに、何やら面映ゆさも感じますが、この頃考えていることを述べ、報恩感謝といたします。

最近「タイパ」という言葉を聞きました。タイムパフォーマンスの略語で、限られた時間を効率よく使うことを指すそうです。

映画は倍速視聴、音楽はイントロや間奏を飛ばしてサビだけ、オンライン講義を1.5倍速で聞いて、重要ではない所は10秒スキップ。合コンの数も激減しているのだと

か。気が合う人を見つけてデートを重ねるのは、時間と労力がかかり過ぎるので、マッチングアプリ等で直接やり取りするそうです。そのことによる犯罪も増えてきていますね。

若い先生方が、教材研究においてタイパの発想に毒されていないかと心配もしています。というのも、校内研究会や自主的なサークルの場で、赤本を広げている姿を結構見るようになったからです。

招かれた校内研究会や主宰するサークルで述べているのは、「赤本や手引きから離れ、教師自らが何度も教材文を読もう」ということです。

群馬の故須田實先生から「雨にしろと濡れるように読むんだ」と教わったことが、今頃になって

「こういうことかな？」と思えるようになりました。

「教材文を何度も読もう」というのは、回数を決めたものではありません。「子どもたちは、この表現に引っかかるかもしれないなあ」と思案する箇所や、「こういう活動をやってみたいと考えるかな?」「こんなことを問いかけてみたいなあ」と考えて内容が思い定まるまで読もうということだと思います。それを「読みに読む」と言っています。非常に非効率的です。

思い返せば、失敗と無駄の連続でありました。歩けば寄り道、話せば脱線。「酒を飲み過ぎなければ、もつと仕事が出来ると」と何度思ったことか知れません。

タイパの考え方は、子どもたちにも現れていないでしょうか? コンピュータからの資料をコピーして、分かったような気になって、いる姿こそ気になります。

効率化だけでなく、寄り道・回り道・無駄骨・無駄足・無駄時間の大切さを、子どもたちや若い先生方に実感していただきたいと思っています。本当は、無駄なものって何もないのです。

「水滸伝」では、梁山泊に集まった志ある若者は、全国に散らばり各地で活躍します。

さざなみ国語教室に集う皆さんが、教育の基本を大切にされ活躍されることを念願しています。

(前 滋賀県湖南市教育長)



▼国語科が育成を目指す資質・能力を、学習指導要領の教科の目標で「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する」と示し、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理している

▼「言葉による見方・考え方」については、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることである」と考えられる。」という叙述がある。抽象的な「見方・考え方」という語句では、分かりにくい。しかし、具体的授業を思い浮かべると分かりやすくなる▼物語の場合、初めの感想を問うことが多い。その場合、抽象的に、楽しい、あるいは、面白いということを問うことがある。また、印象に残った場面やできごと、あるいは、登場人物について問う場合もある。

「対象と言葉」「言葉と言葉との関係」ということから考えると後者に向けた指導が順当である▼一般的に、「言葉に着目する」といわれていることを具体的な学習活動では、「登場人物の状況(設定)」「文脈(展開)に即して」「主に言葉の(使い分けに)」という面で整理できるようにすることが「見方・考え方」を働かせるということにある。(吉永幸司)

漢字学習実践のまとめと
今年度の展望
高木 富也

ここ数年、私にとって漢字指導が柱の一つとなっていて、昨年度の機関誌において、「漢字学習における個別最適・協働的な学び」「導入期における漢字指導の実践」「漢字学習における自由進度学習」と三つの投稿をさせて頂いた。今回は昨年度の実践のまとめと、今年度の展望について述べていく。

結果から述べると、漢字学習の一斉指導を減らし、自由進度学習を導入しても、漢字五十問テストの平均点は下がらなかった。三学期末漢字五十問テストの結果は、平均点九十点、最頻値百点、中央値九十三点であった。年間五回の漢字五十問テストは全て九十点を越えたことになる。私も児童も満足いく結果となった。(一部児童はもつと高得点を狙って悔しがっていたが)

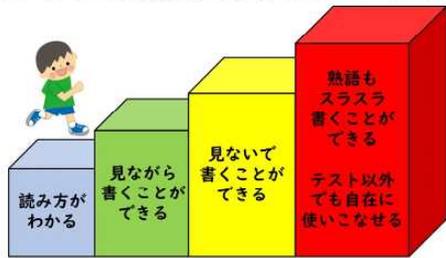
自由進度学習を実施する上で意識したことは、「自己調整を促す」ことである。図に示すように、「何のために漢字学習をしているのか?」「今、どの階段を登ろうとしているのか?」「自分にとって合った方法で学習できているか?」などの声かけをし続けた。例えば、漢字が苦手な小テストでも点数を取り切れない児童が、興味優位でタブレットを触っていたとする。「今、君はどの階段にいますか?」「タブレットも良いけど、小テストで間違った所の復習をしてみたら?」「指書き、空書きで体を使って覚えたら、テスト中も思い出しやすいよ。」など、具体

的な助言をして学び方を自覚・調整させる。立ち位置としては、教師(ティーチャー)というよりは、助言者(アドバイザー)に近いのではないだろうか。そのような助言を、自由進度学習を進めている間に一人ひとりに声かけをしていくことで、自己調整を促しながら、納得させながら学習を進めた。教師が大量に練習プリントをさせたり、丸つけや直しに追われたりするよりも、児童が「学び方」を学び、自己調整していくことの方が重要だと感じた。

今年度は、昨年同様三年生の担任となった。今年度実施したことを、児童が変わってもどこまでできるか、実態に合わせて実践していきたい。また、学年主任という立場からも、自分が指導できることはもちろん、他の学級でも同じように実施できる、一般化できるようにすることが今年度の課題である。新たに出会う児童たちと、「遊び」の感覚で楽しみながら国語教室を創っていききたい。

(東近江市立能登川南小学校)

今、どの階段を登ろうとしているの?



学級づくり
弓削 裕之

今年度、本校の教育チームの1つは「学級づくり」。心に決めたことが2つある。

入学式の日。1年生担任補助の役割を担い、靴箱で子どもたちを迎えていた。大きな手提げかばんから、一生懸命に片手で上靴を取り出す様子としていた。私は思わず「かばん、持ちますよ」と声をかけ、かばんを持った1年生の子は、かばんがなくなっておかげでスムーズに上靴をはくことができている。しかしその時、自分がとった行動にどこか違和感を覚えた。違和感の正体はすぐに分かった。他の先生方は、子どもたちが自分でくつをはき終えるのをそばでじっと見守っていた。時間をかけてくつをはき終えた1年生に微笑みかけ、「教室に行きましよう」と優しく声をかけていた。私がしたのは「お手伝い」であり、「教育」ではないことに気づいた。私がかばんを持ったあの子は、自分の力でかばんを持ち、上靴をはきたかったかもしれない。数日前までは、園で一番頼りにされていた年長さんだった。

転んだ時、すぐにそばに駆け寄って「大丈夫」と声をかけるのが親です。

転んだ時、立ち上がるまで見守り、「よくがんばりましたね」と声をかけるのが教師です。

吉永先生の言葉である。この言葉から見えてくる。子どもたちの自力

の機会を奪いたくない。そう心に決めた。

* * * * *

芦田恵之助先生の作文の授業中、鉛筆で花瓶をカンカンした音がいた。その子に注意しなかったことを参観者から指摘された先生は、「カンカンで誰かの手が止まりましたか。私が注意でもしたら、みんなの手が止まってしまます」とおっしゃったそう。

「みんなとたすけ合う」
一人が「しー」と言うと みんながしーかになった まほうみ
い
「聞いてくださいー」と一人が言う
うとぜんいん聞いた まほうみ
たい
みんなでたすけ合うと 楽しくなる

「さわがしい教室」
教室で耳をすますと ともだちの
声がする
わたしは「しー」と言おうとし
たけど 言わなかった
楽しそうな声 おもしろい声
わらってる声
だからわたしは そのまま前を見た

昨年年度担任した2年生の子が、同じ時に書いた2つの詩である。静かだから良い学級なのではない。騒がしいから良くない学級という事ではない。この子には、学級の姿がよく見えている。子どもたちにとつての幸せとは何かを見極めたい。そう心に決めた。

(京都女子大学附属小学校)

桜ですごい！
少徳 信

今年度から彦根市立高宮小学校に異動し、四年生を担任することになった。そこで、国語の授業開きとして、以前好光先生に教わったことを参考に、桜に関する言葉について学習した。

桜を「花」と表現することを押さえた後、「花の○○」で桜が咲いている○○が表現できることを伝えた。子どもたちは花の窓・花の門・花の家など、身近な桜をどんな言葉として表現していった。また、桜が並んでいる道を桜並木、桜の花びらが固まって流れているのを花筏と言うといったことも教えていった。ある程度出てきてから、○○には場所だけでなくて時間も入ることを伝えた。「そんなんありなん！」など口々に驚く中、朝桜や夕桜、夜桜などの言葉を確認していった。中には聞いたことがある言葉も入っていたようので、子どもたちは自身の経験を言葉で（それも一言で）表現できることを面白く感じていた。さらに桜月夜など、普段の生活の中ではなかなか出会わないような言葉も知り、言葉を知ることの喜びや楽しさをたくさん感じたことと思う。「桜ですごい！」と多くの子が授業後に話に来てくれた。

言葉を知ることとは、価値観を広げることだと思ふ。新しい言葉の数々との出会いは、自身の経験の輪郭となり、経験をより一層鮮やかに彩る。さらに、自分が感じなかったことを言葉を通して感じたり、新たな見方を発見したりすることで自身の価値観は深まり、再構築されていく。

今年度は、特に子ども自身の価値観を広げ、深める言葉の指導に軸足を置いて取り組んでいきたい。言葉を通して人間性を深めることが国語科の目標であることは自明のことだが、昨年度まではどうしても小手先の発問や活動ばかりに気を取られてしまっていた。そこで、もう少し大きな視点で国語科の指導を見つめていければと思う。学級が始まって初めの週の後半には、物語の「白いぼうし」の学習に入る。松井さんの人柄に迫りながら、松井さんという人間の魅力に気付けるような単元にしていきたいと考えている。さらに、四年生では物語だけでも一つの花やごんぎつねなど、読後の感動が尽きることはないような作品が次々と設定されている。子どもたちが一歩一歩学びを積み重ねる中で、言葉に気づき、心を豊かにしていけるよう、精一杯作品に向き合っていこうと思ふ。

(彦根市立高宮小学校)

国語科の学級開き
谷口 映介

今年度は、持ち上がりの四年生を担任している。どの学年や教科にも共通することであるが、学習基盤を確立する上で、日常的に大切にしたいことや取り組みを何点か挙げてみたい。

一、鉛筆の持ち方・美しい姿勢
どの学年においても、学年当初に確認しておきたい。美しい姿勢は、適切な机や椅子の高さも重要になるのだが、足をしっかりと床につけて、背筋を伸ばして話を聴くと学習へ向かう姿勢ができる。

二、話し方名人・聞き方名人
学年に応じて、学習してきた話し方や聞き方を確かめたい。短いキーワードで意識付けをすると効果的である。

【聞き方名人「あいいうえお」】
あ：相手をしながら聞こう。
い：いい姿勢で聞こう。
う：うなずきながら聞こう。
え：笑顔で聞こう。
お：終わりまで聞こう。

無論、これだけではない。自分と友達の考えを比較しながら聞くことや、話の中心や要旨を捉えながら聞くこと等も重要になる。国語科の学習で取り上げたいところである。ここで大切にしたいのは、「目と耳と心で聴く」ことである。従って、表の下には、目・耳・心

(ハートマーク)を付けている。話を聴くことは、人権意識を高める上でも重要な要素だからである。

【話し方名人「かきくけこ」】
か：考えや思いを話そう。
き：聞く人を見て話そう。
く：口を大きく開けて話そう。
け：経験したことをもとに、伝えたいことをはっきりさせて話そう。
こ：声の大きさを考えて話そう。

ここで大切にしたのは、主に「相手意識」である。相手に伝えるためにはどうすれば良いのかという視点で考えるように促すことが大切であると考えた。相手や目的が明確になると、話の組み立ての工夫へと繋がりがやすいだろう。また、自分は何を伝えたいのかを問い直すことにもなる。

三、心が温かくなる言葉五十音
語彙の拡充もかねて取り組んでいる。五十音を表にしたプリントを配布し、「一人でアアブループ全体」で段階的に交流して言われてうれい言葉や、教室にあふれさせたい言葉を広げていく。例えば、「あ」：ありがとう。「い」：いっしょに遊ぼう。

「そ」：そばにいるよ。などである。濁点を付けてもよいとする。(例：「が」：がんばろうなど。)一時間で全て埋める必要はなく、一年をかけて言葉を集めて書き加えると素敵な掲示にもなる。

(竜王町立竜王小学校)

ブックトークの取り組み顛末
(小3生対象)

森 邦博

1ブックトークのきっかけ

2年前の5月に「草津お話研究会」会員の方との市立図書館での出合いがきっかけで入会した。図書館や学校・園や地域で本の読み聞かせやお話会を行うサークルで、これまで四十年間続けておられるそう。

月例会では、会員や図書館司書さんの「試演」の時間がある。

寝めるところは寝め、直すべきところへの忌憚のない意見や感想が飛び交う。おかげで素話、読み聞かせの留意点や配慮点の他、お話会のプログラム構成や進行のノウハウを体験的学ぶ機会をいただいている。いちいち納得のいくことばかり。四十年の重みである。

3月には、近江八幡市内で二人ブックトーク(二人で掛け合いで進行。笑いの要素もあり関西らしい?)を実践しておられる方を講師に招いての研修機会もあった。そして、私がこの四月にブックトークを「試演」することになったのである。

これまで勤務する学校でミニブックトーク(三冊程度の紹介と読み聞かせ)を即興で気楽に行った経験はあるが、サークルの先輩を

前にとすると正直心中穏やかならずという中ででの取り組みの顛末である。

2ブックトークの顛末

① テーマと選書

ブックトークには「テーマ先行型」と「選書先行型」、「折衷型」がありそうである。私の場合は折衷型。

テーマを立ててネットや図書館でのテーマに関する本のリスト作りを始めた。が、なかなか思う本が見つからず何度も図書館に足を運び、是非この本も紹介したいと追加していくと選書リストが大量となり、テーマを絞って分類し直すことにした。テーマ別にリストの本をあれこれと移動し差し替えをしていくうちに、テーマがよりはっきりとしていき、同時に、そのテーマに沿った必要な本がくつきりと浮かんできたりしてきた。選書の性質が目的なものに変容していくのも実感したのであった。

「集める」「整理する」「取捨選択する」の過程と「課題(テーマ)」は、互いに深く関連しつつ醸成されていくということ。これはまさに課題解決学習、そして情報活用活動のプロセスそのものを体験しているのだなあと気づくのがだった。

② シナリオとリハーサル

次は、進行表・シナリオにまとめ、練習するのみ。

何人かにお聞き頂きながら、紹介する本の順番の入れ替えをする。その度につなぎの言葉の再検討、シナリオ内容も修正。本が傾いていないかを鏡を使って確かめながら読み聞かせ練習。作成した補助資料のホワイトボードへの貼り付け場所の検討等々。なかなかハードな毎日だった。老体に鞭打つ日々(ちよつと大袈裟だが)を経て、試演の当日を迎えたのだ。

③ 試演と振り返り

試演の当日には、会員や図書館司書の方々が会場設定をしてくださった。30名程のオーディエンスを前に始める。

(導入シナリオを一部の抜粋)
「みなさんこんにちは、森」という文字はいろいろな種類の木がたくさん集まっているイメージがありますね。漢字って面白いなと子どもと頃から思っていました。さて、「木」という字に一本足すと「本」。「木」二つで「林」。では「本を二つ」並べると…「本箱」です。「本を三つ」で「図書館」になりそうですね。本の森は図書館。そこでみつけた素敵な本を紹介しましょう。〜(以下略)
30分間の試演の後は、会員お一人お一人からの感想をお聞きする時間。

テーマと本の関係、本の提示の仕方など、次に生かしたいアドバイスを頂いた。

(京都女子大学講師)

編集後記

▲三月例会(第四九二回)は、川端由紀さん(草津市立志津小学校)の実践提案。草津市教育委員会の教育研究に応募し一年間通して取り組まれたことについての報告でした。まず、意欲を持っての研究と実践の姿勢に脱帽です。

▼私たちは、一時間の授業活動について、また一単元の指導過程についても、見通しを持って計画的に進めようとしています。その基盤には年間を通しての目標があります。川端さんはそのことを研究実践に応募することで明示化されました。実際に応募する・しないに関わらず、こうした教育活動へ向かう姿勢を持ちたいものです。

▼提案の前身では、M児の4月と3学期の学習日記を提示され、作文力の向上が具体的に読み取れました。事前事後の児童アンケート結果にも、子どもたちの作文への意識の大きな変化が表れていました。▼教育実勢の成果は児童の変容する姿の現れで語ることが求められます。児童の変容の姿を考察し、そこに今後の授業改善の糸口を学び取り次に生かす営み。それが教育実践の基本だと改めて確認することが出来たように思います。▼「教えるは学びの始め」と言われます。主体的な指導者であり続けるためにも、常に主体的な学び手でありたいものです。

▼巻頭には、谷口茂雄様から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。(森 邦博)